

●読書案内●

<『むくげ通信』253号、2012.7.29 より>

徐根植『鉄路に響く鉄道工夫アリラン

—山陰線工事と朝鮮人労働者—

飛田雄一



明石書店
ISBN 9784750335896
46 版・192 ページ
2012/05/15
2200 円 + 税

本書は、兵庫朝鮮関係研究会（以下、兵朝研）代表の徐根植さんがこれまでの研究をまとめて単行本として刊行したものである。もとになっているのは、以下の3つの論文だ。

1. 「山陰本線、桃観トンネル及び余部鉄橋と同胞」（兵朝研『兵庫と朝鮮人』1985.8、自費出版）
2. 「山陰線敷設工事と朝鮮人労働者」（兵朝研『在日朝鮮人九〇年の軌跡』1990.12、神戸学生青年センター出版部）
3. 「山陰線工事と朝鮮人労働者」（小松裕・金英達・山脇啓造編『韓国併合』前の在日朝鮮人』1994.9、明石書店）

4. ●

兵朝研とむくげの会は切っても切れない関係だ。兵朝研の発足は1983年で、最初の代表は故・金慶海さん、二代目の代表が徐根植さんだ。むくげ、兵朝研それぞれの節目の年にはお祝いの会を協力して開いた。むくげの会20周年の集い（1991）は、ダム建設で犠牲となった朝鮮人の名前が刻まれた石碑の残る兵庫県社町の昭和池公園で兵朝研が開いてくれたが、その時の特製の記念ビールと大弾幕は今での語り草となっている。

兵庫県地域の在日朝鮮人の歴史を掘り起こし記録することが兵朝研のテーマだが、その研究成果をもとによくフィールドワークも開催した。いまでもそフィールドワークは珍しいものではないが、1989.11の朝鮮史セミナー「兵庫県下の在日朝鮮人の足跡を訪ねる旅」では、兵朝研の徐根植さん、故・鄭鴻永さん、むくげの寺岡さんがガイドで、「朝鮮国獨立」の文字の

残る甲陽園地下壕跡、昭和池、山陰線関連、古代史までフルコースのフィールドワークであった。



徐根植さんが代表をつとめる山の会からのお祝

本書の内容は、以下のとおりである。

1. 「鐵道工事中 職斃病死者 招魂碑」との出会い
 2. 山陰線
 3. 工事に従事した朝鮮人労働者の確認
 4. 山陰線工事に従事した朝鮮人労働者の仕事と犠牲者
 5. 工事に従事した朝鮮人労働者の人数
 6. 山陰線工事に朝鮮人労働者が従事することになった経緯
 7. 余部の墓地にあった曹鉄根の墓
 8. 鐵道石造遺跡（山陰線兵庫県内）
- 附録 朝鮮人の名前が刻まれた鐵道石碑（1945年以前建立）

●

最初の『鐵道工事中 職斃病死者 招魂碑』との出会い」にもあるが、徐根植さんの石碑にかける思いは重い!?（フィールドワークで洒落を連発する徐さんの影響がでてしまった!?!）。会社側の資料に朝鮮人労働者のことがまったく残されていない状況のもとで、石碑に刻まれた朝鮮人の名前は動かぬ証拠である。1984.8に兵朝研が但馬たじま地方（兵庫県北部）にでかけたときに入手した「久谷の八幡神社に朝鮮人犠牲者の名前を刻んだ石碑がある」という情報から徐さんの山陰線工事と朝鮮人の研究が始まる。その碑は、1911.10.1

建立、「韓国併合」の翌年だ。1980年代にはまだ「併合以前に日本にいた朝鮮人はほとんどが留学生」というのが常識となっていたが、7名の朝鮮人犠牲者の名前を見つけたのである。その時の衝撃を徐さんは、「ああ、間違いなく同胞だ。朝鮮人の名前だ。明治時代に山陰線工事で浜坂にやってきて亡くなった同胞がいたのだ」と書いている。

石碑の朝鮮人の名前から始まった研究は、網羅的な新聞記事調査、聞きとりなどによって、それまで分からなかった部分が少しずつ分かってくるのである。

石碑のことでは、その後、2002.8、豊岡で開催された強制連行写真展に見学に来ていた小学校の先生から「浜坂にある山陰線敷設工事殉職者の招魂碑にある朝鮮のかたと同じ名前が刻まれた墓が余部にある」との情報が寄せられる。先の招魂碑に朝鮮人の名前があることも奇跡のようなことだが、その1名の名前の墓が残っているというのはもっと奇跡的なことだ。私はその後のフィールドワークでは余部の墓を何回か訪ねたが、余部鉄橋を望む墓地の一角にその墓はある。



曹鉄根の墓



墓から余部鉄橋を望む

「7.余部の墓地にあった曹鉄根の墓」に詳しいが、その後、太田修さんがその曹鉄根の出身地について韓国で現地調査によりほぼ明らかとなっている（太田修『朝鮮近現代史を歩く一京都からソウルへ』2009）。研究は進めていけば手がかりがみつき、その手がかりがまた新しい発見につながるということを実感させてくれる事例だ。

（左写真は本書 110 頁より）

徐さんは相当の「鉄ちゃん（鉄道マニア）」であるらしい。余部鉄橋の工事方法、桃観トンネルの長さが伸びた秘話などの紹介も鉄ちゃんらしい。トンネルのレンガの積み方もいろいろあることも研究している。イギリス積み、フレンデル（フランス）積み、小口積み、長手積みである。本来的に凝り性の徐さん故のものかも知れないが読者にはそれも楽しいものである。

「附録 朝鮮人の名前が刻まれた鉄道石碑（1945年以前建立）」では、兵庫県以外の石碑について調査をしている。肥薩線（熊本県）、近鉄奈良線、旧鹿児島

本線、旧参宮急行鉄道（三重県）、丹那トンネル、三信鉄道（JR飯田線中部天竜駅付近）、釜石線土倉隧道、関門トンネルにまでかけ、それぞれ撮影、実測文字の記録をしている。石碑の文字はなかなか読みにくいもので、拓本もたいへんだ。徐さんは丁寧に出来る限りの文字化をしている。

本書には「4.山陰線工事に従事した朝鮮人労働者の仕事と犠牲者」に聞き取りの記録もある。桃観トンネル工事関係の飯場情報などである。1984.9の2名の聞き取りだ。「話が飛んだりしているが、朝鮮人のこと、当時の工事現場のことが分かるので録音テープのメモを転載する」とある。貴重な記録だ。聞き取りは大切なことだが、テープさえ残せばいいというものではない。ある意味ではテープだけ残っても意味がないのではないだろうか。というのは、録音時にはいろんな状況があるし、後日、確認しなければならないこともある。その意味では、大変だが聞き取りをした人が、文字化もしなければならないのだ。旧朝鮮総督府の役人の聞き取りテープが旧友邦協会にあり、かつて宮田節子さんらがおこなった聞き取りテープもある。その文字化が現在も進められているようだが、複数の質問者がインタビューした講演会的な聞き取りは後日、第3者が文字化することも可能化もしれないた、現地調査での聞き取りなどは、質問者自身が文字化しなければならないだろう。徐さんの今回の文字化はこのような意味からも貴重だ。亡くなられた鄭鴻永さんも多くの聞き取りをしておりそのテープも残されているようだが、もはやその文字化は不可能だろう。故・朴慶植さんのものも同じことがいえるのではないかと思う。

徐さんは、円山川改修工事、篠山鉦山のことも研究されている。いずれそれらのテーマについても単行本化されることを期待したい。

個人的なことであるが、徐さんが、肝炎を患いインターフェロンの辛い治療を続けるなかで回復し、出版にこぎつけたことを、同年代の私としては特に喜び、感激ひとしおである。

